

# 松平文庫本「後深草院弁内侍家集」について

— 附、同文庫本「弁内侍寛元記」について —

坂口博規

一

『弁内侍日記』は、後深草天皇の宮廷に女房として任えた弁内侍が、身边に見聞した出来事を日次の記という体裁で記した、所謂日記文学である。しかし一七五段注1の叙事は、その殆どが和歌を末尾に置いて締めくくられる話であり、それは詞書的小説としての役割をなしており、この作品が「家集」という呼称を有して伝えられる理由ともなっている。本稿で取り挙げた島原図書館所蔵松平文庫本もその「家集」の名を持つ伝本の一つである。

作者弁内侍は、歌人、画家、また『今物語』の作者として知られる藤原信実の女で、同じく歌人であり似絵の名手隆信は祖父にあたる。姉には藻壁門院内侍、妹には少将内侍注2がおり、共に優れた女流歌人である。作者も、『続後撰集』以下『新続古今集』までの十一勅撰集に合計四十四首入集されるなど、やはり世に許された歌詠みであろう。本作品に二百首（内勅撰集と重複歌五首）、とその他に見えるものと合計して三百八十一首注3が知られている。父信実は『水蛙眼目』によると謙遜の人であり、数寄の士であると伝注4えるようであるが、そうした父の影響また家の環境が、作者

の歌人としての才能を形成していったと考えられている。

さて本作品は周知の如く、寛元四年（一二四六）正月二十九日、後嵯峨天皇がわずか四歳の後深草天皇に御讓位あそばしたという記事から書き出される。

寛元四年正月二十九日、富の小路殿にて御讓位なり。そのほどの事ども、かずかずしるしがたし。いといとめでたくて弁内侍

今日よりはわが君の世と名づけつつ月日し空にあふがざらめや

この時より三年前の寛元元年十一月十七日に催された『河合社歌合』に、左方歌人として登場する「春宮弁」は、弁内侍である（父と姉・妹も出詠）とすると、作者は後深草天皇の東宮時代から仕えていたことになる。寛元元年八月十日の立太子の時から、あるいはその二ヶ月前六月十日の御誕生と同時に親王付きの女房となったとすると、以後身近にお任せしていた弁内侍にとって、後深草天皇の受禪に際し、「いといとめでたくて」とも「今日よりはわが君の世」とも言葉にするその心の内がいかにばかりか、想像するに難くない。次いで三月十一日の即位の儀式に筆は移るが、そこで作者は「いはむかたなくめでたし」と記す。まさに「いはむかたなき」程の慶事から作者は「わが君」後深草天皇の御世を書き残そうとしたものである。『増鏡』の「おりるる雲」の巻、『玉葉集』雑一「神」部所収歌詞書により、弁内侍は正元元年（一二五九）十一月二十六日の後深草天皇御退位間近か迄宮中に侍していたことが知られており、恐らく御退位と同時に宮中を退いたと思われる。とするならば、本作品は寛元四年の受禪から正元元年の御退位までの十三年間の、公的行事を中心とする宮廷に見聞した出来事を筆録したものであったとの推測も首肯出来よう。しかし周知の如く、本作品は建長四年（一二五二）十月十三日の近衛兼経撰撰政辞任の記事を最後に（残る一段

は年時不明)、以下散佚しており、頂度後半部を失ったことになる。それが同量の記述であったか否か不明であり、また同等年数によってのみ半分散佚という訳にもいかず、やはり全体は不明と言わざるを得ない。

現存の伝本は諸本みなその本文末尾の欠損状態が共通しており、恐らく同一祖本から派生したものと思われる。諸本は一冊本と上・下(下は建長元年十一月の五節の記事より)二冊本に大別されるが、一冊本が初生の形を示すものと思われる。

本稿で取り挙げた松平文庫本「後深草院弁内侍家集」も一冊本の体裁で、末尾の欠損状態も諸本と共通している。本書には他伝本に見えぬ本文を持つところがある。反面長文にわたり脱落があつて善本と言ひ難いが、以下他伝本の異同部分を中心に本書を紹介、本稿と別に翻刻を試みたいと思うのである。<sup>注6</sup>なお本書が諸伝本中どのような位置に立つものかは向後の課題としている。また同文庫本として「弁内侍寛元記」と題する一本がある。こちらも一冊本であるが、この本についても少々触れてみたい。

## 二

松平文庫本「後深草院弁内侍家集」(架蔵番号「松一一六一三二」)は縦二七・四センチ、横二〇・一センチの袋綴一冊本で、青色の表紙の左上方の題簽に「後深草院弁内侍家集」と外題がある。内題はない。前後に遊紙が各一丁ある。墨付は九十丁、二丁オモテより本文が始まり、各面は十行、各行二〇〜二五字程度、和歌は一行書きである。九十一丁ウラに識語がある。同面左下端に印があり、上方に六角縦長に「尚舎源忠房」、その下に横に楕円形白抜きで「文庫」

と押ししている。

さて奥書であるが、次の如く記している。

私云

(1)此集後深草院辨内侍歌多見之仍号彼集」此弁内侍者閑院冬嗣公一男中納言長郎卿之」末葉中務太輔信実息女也」

(2)右至書之末虫損多其所々明置畢重而以」類本可校之

（通用漢字に改む。」は改行）

とあつて、右に便宜上(1)、(2)と番号を付したが、その(1)の識語は他伝本にも見えるものである。問題は「信実息女也」の下に、他伝本にある割書が松平文庫本に見えぬ点である。その割書を群書類従本に見ると「弁内侍日記下云々」とあり、静嘉堂文庫蔵小諸蔵書本では「弁内侍日記ト云々」、同文庫蔵和学講談所本では「弁内侍日記トモ云」とある。この点について玉井幸助氏は『弁内侍日記新注増訂版』（以下『新注』とさせていただく）にて、和学講談所本の記述が最も正しく、「モ」の字形が「云」に似ているため「ト云々」と誤写、更に筆勢で「ト」の上左端に枝が出たために行書の「下」の字の如くなつてしまつたと推定され、次いで、

但しこの「弁内侍日記トモ云」の八字は1の奥書に初から付いていたのではないらしい。彰考館本には、もとこの八字がなく、この本に手を加えた安藤為章が朱筆で「弁内侍日記ト云々」と加えている。小諸本の如き本によつて校合したのであろう。

との考えを示されている。とすると単純に考えれば、まず虫損によつて後半部を散佚した原本があり、それを書写した二次本があり、「私云此集——信実息女也」と奥書を持った三次本が成立、更にその末に「弁内侍日記トモ云」という割書をもつ四次本、「ト云々」とする五次本、「下云々」とする六次本が成立するという具合に、奥書から推すと、

群書類従本（『新注』底本）を最終形態を示す本とみて六段階の伝本成立の過程を考えることが出来よう。原本から二次本の書承段階で(1)の奥書を持つことも考えられるから、五段階で成立過程を考えることも必要である。今虫損により後半を散佚した原本から二次本が成立としたが、周知の如く『弁内侍日記』は永正九年（一五一一）六月成立の豊原統秋著『体源抄』に、その第十二巻で「弁内侍日記ノ事」として十五条の本文が抄録されており、ここに現存伝本には見えぬ字句があり、よってまだ虫食による本文欠損のない本を統秋が被見していたことが考えられるから、そして現在少くとも現存伝本以上に本文を有する伝本が報告されていないので、二次本の成立は永正九年より更に下る頃と想定出来る。私は諸本の大方を被見していないので、伝本相互の系統まで論じ得ないし、また「弁内侍日記トモ云」という奥書を持つ静喜堂文庫蔵和学講談所本が上下二冊本であり、そこから二冊本の系統は四次本以後と単絡的に論じる訳にもいかぬであろうが、少くとも奥書から一つの目安としては、五乃至六次の伝本成立の過程を考えることは許されると思うのである。

問題としたいのは、松平文庫本「後深草院弁内侍家集」（以下「家集」とする）が彰考館本の親本同様、奥書の末に「弁内侍日記トモ云」という割書を持たぬ本であるということであり、玉井氏の前引のお考えによれば、割書のない奥書を持つ本が先行、換言すれば古態性を示すということになり、この点からのみ言えば、松平文庫本「家集」は静嘉堂文庫蔵の二本より先行する本の書承本として、その位置を考えてよいということになる。故に松平文庫本「家集」よりその親本の位置が問題となる訳である。岩佐美代子は彰考館本「弁内侍日記」について、「いかにも欠損の生じた祖本をそのままのうぶな形で写したような趣を残している」とされ、同本の価値を問われている。<sup>注8</sup>その親本奥書が「弁内侍日記トモ云」という割書を持たぬものであれば、やはり同様の松平文庫本「家集」も、祖本に近い趣を

残す本として、その価値を問いたいのである。

次いで前引の(2)の奥書に触れたい。この識語は他伝本には見えぬもので、この本の筆録者自身が書写後に独自に記したものであろう。試みにその読みを記すと、

右書之末ニ至リ虫損多シ。其レ所々明シ置キ畢ヌ。重ネテ類本ヲ以テ之ヲ校ス可シ。

（傍線著者）

というのであろう。問題は傍線を付したところで、虫損により判断不可能な箇所を、筆録者は如何に「明置」いたかという点である。本文中に「歟」と補う箇所が四十五あり、うち他伝本でも傍注として空字を補っているものはわずかに十二箇所である。今それを書き出す。なお（）内は丁数、また下に『新注』の段数と頁数を記す（以下も同じ）。

- |   |           |
|---|-----------|
| (1) 「なこりの <small>みこ</small> 歟そ」 (2ウ)          | 7段 8頁     |
| (2) 「わたらせおはしまして <small>歟</small> 」 (68ウ)      | 130段 231頁 |
| (3) 「花のかも <small>今をさかりと歟</small> 」 (70オ)      | 132段 236頁 |
| (4) 「はなやかへり <small>歟</small> て」 (70オ)         | 132段 236頁 |
| (5) 「みれとも <small>歟</small> あかぬ」 (70ウ)         | 133段 237頁 |
| (6) 「おりし <small>もくろな歟</small> の」 (72オ)        | 137段 242頁 |
| (7) 「こうたうのないしとの <small>しか歟</small> きくや」 (72オ) | 137段 242頁 |
| (8) 「御かふりは <small>こ御ゆる歟</small> つき」 (73オ)     | 139段 245頁 |
| (9) 「一の <small>たい歟</small> 六けん」 (73オ)         | 139段 245頁 |

(10) 「さほにしろき一重敷かさねの」(73オ)

139段 245頁

(11) 「きかせをは敷します」(76オ)

142段 252頁

(12) 「木の丸とのに敷」(85ウ)

161段 283頁

の十二箇所である。玉井氏の『新注』の考異を参考にさせていただきながら、他伝本においてこの十二箇所を見ると、(1)は群書類従本(以下群本)では欠字、小諸蔵書本(以下小本)も同じ、和学講談所本(以下和本)は松平文庫本(以下松本)に同じ、彰考館本(以下彰本)は「みこ敷そカ」と傍注、(2)は和本・小本とも松本に同じ、群本・彰本は「てなし、(3)は他伝本欠字、(4)は和本・小本とも松本に同じ、群本欠字、彰本は小さく「か・マ」と書入れ、(5)も和本・小本とも松本に同じ、彰本は「みれと・」とし群本は本文中に記す、(6)も和本・小本とも松本に同じ、彰本・群本は本文として記す、(7)も和本・小本とも松本に同じ、彰本・群本は欠字、(8)は彰本も松本に同じく「はこ御ゆる敷」と傍注、他伝本は欠字、(9)は和本・小本・彰本・内閣文庫本「弁内侍寛元記」(以下内本)とも松本に同じ、群本は「へ

のたひか」とす、(10)は他伝本欠字、(11)も和本・小本(但し「せおは敷」)・彰本とも松本に同じ、群本は欠字、内本は本文中に記す、(12)も和本・小本とも松本に同じ、彰本・群本は本文中に記す、等々である。よって松平文庫本の傍注は和学講談所本と小諸蔵書本に共通するものが八例と多く彰考館本と共通するものは三例、但し(8)は他伝本になく彰考館本のみ共通するのは注意すべきか。群書類従本とは十二箇所全て一致しないというのも興味深い。

さてここで考えるべきは、今挙げた十二箇所が松平文庫本筆録者の推測によるものか否かという点であろう。「明置」とし「敷」とあって、確かに推測により傍注したと見ることも出来るが、今他伝本と比較した如く、松平文庫本「家集」が独自に持つ傍注はわずかに(3)(10)の二箇所で、全てが独自の語を持つものではない。前後から斯く推測するのは

造作ないものもあるが、例えば(12)などは推測で思いつくとするにはいかがであろうか。また残る三十三箇所は、異同あるものもあるが全て他伝本の本文に見えるものばかりで、これら四十五箇所全てが筆録者の推測による傍注とするには、やはり疑念を持たざるを得ない。残りの三十三箇所を厭わず順に記すと、「風す、しくふきて敷けいき」(1ウ3段 P.3)「こんらうをとをり敷て」(2オ5段 P.5)「女て敷所」(4オ11段 P.14)「まことにさきた敷るやうに」(4オ11段 P.15)「おしいたしのころよそい」(7ウ16段 P.25)「けんし、まもり」(15ウ31段 P.54)「あさかれる敷のひろひさし」(64オ124段 P.221、群本・和本・小本・彰本「あさかれるよのひろひさし」)「申文にかきのせたりし敷」(66ウ127段 P.227、他本「をは」)「十八日より敷」(66ウ130段 P.231、他本「よりは」)「たれくもまいり敷しかとも」(67ウ130段 P.231、群本「し」なし)「心とけて敷も」(69オ130段 P.232)「此雪に内侍たちさた敷めて」(69ウ130段 P.232)「いよの内侍はてかきな敷れと」(69ウ130段 P.232、他本「てかきなれは」)「おもし敷ろかりし夜」(70ウ133段 P.237)「ふかきと敷いふや」(71ウ135段 P.239)「かたみといふものひ敷ちに」(71ウ160段 P.241)「御はんさう敷たらひ」(73オ139段 P.245)「まきかひすりたる御敷つし」(73オ139段 P.245)「御手はこ敷御す、り」(73オ139段 P.245)「たまかみなどのやうに敷」(73ウ139段 P.245、他本「か、み」)「千とせの秋の敷」(74ウ140段 P.247)「南殿釵殿」(75オ140段 P.248)「やとりた敷る程」(75オ140段 P.245)「露台のき敷」(75オ140段 P.248、他本「のきは」)「ひまもる敷月の」(75ウ140段 P.248)「いさたちきかん敷とて」(75ウ141段 P.250)「かたさまにてきけは敷」(75ウ141段 P.250)「宮内卿すけとの敷」(76オ142段 P.252)「内裏のけいき敷」(76ウ144段 P.255)「時しもあれ敷など」(77オ144段 P.255)「おもしろ敷など」(77ウ145段 P.257、他本「し」、群本「おもしろく」)「身にし敷むかせは」(78オ146段 P.259)「ゆふひの敷かけ」(87オ167段 P.289)の三十三箇所である。これらを松平文庫本「家集」筆録者の推測によるものと見てもよからうが、中に他本を参照せねば補えないのではないかと思われるものもある。今にわかには決められぬが、私は他本をもって「明置」という、即ち校合があったと考えたい。右三十三箇所に他本と異



同あるもの（「あさかれ<sup>る</sup>歟のひろひさし」の例、これは「よ」を脱落か、あるいは本来か）もあるが、かくも他諸本の本文と同じ語を補うことを考えれば、また他伝本にも「歟」として同じ語の傍注があることも考えあわせると、やはり校合があったと考えるべきと思うのである。勿論松平文庫本の親本自体が「歟」と傍注するものをそのまま写したのもあろう（全てとすれば、校合はないということになる。それでは奥書の「明置」の意味はない）。

そこで前に指摘した、他伝本には見えぬ松平文庫本が独自に持つ二箇所の傍注を考えたい。(3)「花のかも今をさかりと歟」(10)「さほにしろき一重かさねの」であるが、これを筆録者が推測により「明置」いたものだとするならば、例えば(10)は、本文上に「一」はあり次が欠字であったため、「重」を補ったということになる。しかしこの部分は他伝本は「さほにしろきかさね」とする。但し彰考館本では「さほにしろき□かさね」と小空白があるから、やはり「かさ」の上に「一重」の語が本来あったと考えてよいと思う。松平文庫本の親本は「一」を残し、彰考館本の親本は「一」も欠いたということになる。「一」があれば「ひとへがさね（一重襲）」の語が浮かぶのは造作もないことと思われる。しかし(2)の「今をさかりと」の語はいかがであろうか。

そこで(2)を含む一段（玉井氏著『新注』一三二段「馴れける宮の花」）を引見すると（松平文庫本「家集」70丁オ3行目より同丁最後まで）、

やよひの十日ころ

御かたのはないとさかりなるにこそのはるは

さにて花山

院宰相中将日ことにまいられしになにとやらんしはしこもりゐられたりし所へ一枝おりてつかはすとて兵衛督殿にかはりて弁

こそ春なれける宮の花のかも今をさかりと歟思ひいてすや

返事宰相中将

みや人のなさへのかる、このはるははなやかへり敷てあたにみるらん

とあるが、他伝本には上述のごとく「こぞの春」の歌の第四句は空字である。この歌について玉井氏は、

脱落があつて明らかでないが、大意は、去年の春は毎日出仕なされて御覧なされた花が、今年も匂うていますのに、それを思い出しなさらぬのでございますか、とんと御出でになりませんか。（傍線筆者）

と後注に歌意を想定されている。注。玉井氏が推測されたように、空字部分に今年も桜が盛りとなって芳しい香に満ちているという意の語が入ることは筆録者も思い浮かぶかもしれぬ。詞書に当たる叙事にも「はないとさかりなるにこそのはるは」とあり、今は花の盛りの頃という語をそのまま歌に持つてきていて、歌意は齟齬をきたすことなく、まさに玉井氏の想定されたとおりの解釈が成り立つ。試みに私に解釈すれば「去年の春日毎出仕され親しんだ宮廷の花の香も薫っておりますが、今がその盛りの頃とお思い出しなさいませんか、いやお思い出しなされてきつとなつかしんでおられることでしょうか。お思い出しになったらどうぞお顔をお見せ下さい」とでもなるうか。「今をさかりと」も推測するには造作もない語かもしれぬ。しからば他に空字となっている箇所でも、更に筆録者が推測の労をとり独自に傍注を附した箇所があつてもよいように思われる。(3)(10)の部分が推測し「明置」に容易であつて、他は困難であつたという理由は如何であろう。となれば、やはりこの二箇所も松平文庫本の親本、あるいは校合に用いた伝本に「敷」として傍注があつて、それを写したと考える方がよいのではなからうか。更に言えば、こうした独自の傍注を持つ松平文庫本「家集」は、他諸伝本よりも初生に近い跡を残していると言えないだろうか。以上の如く奥書あるいは傍注から松平文庫本「家集」の古態性を考察したが、次いで他伝本にはなく松平文庫本「家集」のみが持つ文があり、更

に私見を補いたい。

三

玉井氏著『新注』では八一「閑院殿炎上」の段で、宝治三年（三月十八日改元建長元年）二月一日夜の閑院内裏火災の騒ぎを記した話であるが、その中程に、

—— 勾当の内侍殿やがてよるのおとどへ入りて剣璽とりいだしまゐらす。油の小路の門のかたへ行く。御所も二位殿いだきまゐらせて、中納言。少将の内侍は大原野の使にたちてここちわびしくて局にふしたりけるが、あらく叩く音におどろきて、火とききていそぎ御所へ参りたりければ人もおはしまさず、けぶりはみちたり。

—— 下略

（『新注』143頁6～9行、傍線筆者）

とあるその傍線部について、玉井氏は後注に、

ここは、「中納言」の下に「のすけ殿御供にて、同じく油小路の門の方へいらせ給ふ」などの句が脱落したものであると思われる。

と推測されている。<sup>注10</sup> 同じところ群書類従本、彰考館本、和学講談所本、小諸蔵書本は共に「御所も二位殿いたきまいらせて中納言少将の内侍は」とある（小諸蔵書本・群書類従本は「御所」の右に「後深草」と傍注あり）。ここを松平文庫本「家集」に見ると、

—— 勾当の内侍とのやかてよるのをとらへいりてけんしとりいたしまいらすあふらの<sup>39ウ</sup> 勾当の門のかたへ

ゆく御所も二位殿いたきまいらせて中納言のすけとの宮内卿のすけとのみなつゝきてまいり給ふ少将の内侍はおほはらの、使にたちて心ちわひしくてつほねにふしたりけるかあらくたゝくをとにおとろきて火ときゝていそき御所へまいりたりければ人もおはしまさすけふりはみちたり――

とあつて、他伝本にはない字句が見えるのである。この傍線部は伝本初生の段階で、換言すれば原本に本来あつたものではなからうか。「御所も」とあるから、劍璽を持って油小路の門の方へ逃れ出た勾当内侍と共に、二位殿が御所（後深草天皇、当時七歳）を抱いて油小路の門の方へ逃れ、中納言のすけ殿もそれに続いたと読むべきところである。大原野祭の祭使に立つたのは中納言のすけ殿と少将内侍の二人ではなく少将内侍一人である。玉井氏の推測された通りである。松平文庫本「家集」の筆録者も、文意通らぬこの箇所に脱落ありと見て玉井氏と同様の推測を当てることは考えられないことはない。しかし宮内卿のすけ殿の名を挙げることはいかがであろうか。前の方にその時御所にいた女房名を記す。即ち「（弁内侍が）朝餉より常の御所へ参りたれば、宮内卿のすけ殿、兵衛督殿、勾当の内侍などはせ給ふ」とあつて、逃れ出た女房の一人に宮内卿のすけ殿の名を挙げることは可能である。しかしここは筆録者の推測による傍注ではないのだから、筆録者の考えというより親本にあつた字句と見るべきである。他伝本に見えぬ字句でありその親本にあつたとすると、松平文庫本はこの部分においても、伝本初生の跡を残す特異な伝本と考えられぬであろうか。『弁内侍日記』の諸伝本中、松平文庫本「家集」は注目すべき伝本の一つと考えるのである。しかし実は欠点も多く持った伝本である。前節で、校合があつたのではないかと述べたが、それを窺わせる箇所があるので、次に引用する。

『新注』一二六「賀茂臨祭」の段にある歌であるが、『新注』より引見するに、

藤なみのかざしによりし面影のなどてもはるにたちわかるらん

とあって、内閣文庫蔵「弁内侍寛元記」は第四句を「などてはるにも」とあるようだが（『新注』玉井氏考異による）、彰考館本は、

ふちなみのかざしによりしおもかけのなとて・たちわかるらん

とあり内閣文庫本と同じ、静嘉堂文庫蔵和学講談所本は、

ふちなみのかざしによりしかるよりもおもかけのなとてはるにもとてたちわかるらん

と内閣文庫と同じ句が校異として記してある。また同文庫蔵小諸蔵書本では、

ふちなみのかざしにかるよりもおもかけのなとてはるにもとてたちわかるらん

と和学講談所本と同じ歌をとって、校異に「も」が二度用いられている。群書類従本は、

藤浪のかざしによりし面影のなとてもはるに立わかるらん

とある。さてこの歌を松平文庫蔵本「家集」は（66才）、

ふちなみのかざしたるよりもおもかけのはるにもちとてたちわかる覧

となっていて、「はるにも」の語が注記されている。「歟」と付していないが、これも筆録者の推測によるものと見ることには出来ないだろう。「はるにも」はやはり他本との校合による校異と見た方がよいと思う。「かさしたる」は和学講談所本、小諸蔵書本に「かさしかる」の誤写と見るとして、「とて」の語を持つ点、松平文庫「家集」の歌は和学講談所本乃至小諸蔵書本の歌と同じ歌ではないだろうか。そして校合に用いた本の歌も、「なとて（も）」の語を校異に持っていない点から、彰考館本や群書類従本の歌と同じものではなく、和学講談所本の形の歌であったことが考え

られる。それにしても松平文庫の歌は歌意不明と言うしかない。

このように意味不明な箇所を松平文庫本「家集」は持っている。こうした例は他の諸伝本にも指摘出来ることであろうし、これはささいな例であるが、本伝本の価値を左右する大きな脱落が更にある。次節でこの脱文を示したい。

#### 四

玉井氏の『新注』では九二「月待つほど」と題した章段で、松平文庫本「家集」では、47丁ウ8行目から48丁オ4行目に当たり、次の如くである。即ち、

（筆者注、他本「またせ給ふほど」）

摂政殿まいらせ給て廿一日のよの月いと心もとなくまたせすほと人くゝにいてたるやとはせ給へはさまくゝにやうをかへて申に山のこなたへはいてなからひかり<sup>47ウ</sup>のいまたあらはれぬと申人侍りしをこの申やう念ありてさもありなと人くゝもおほせられしかは弁内侍

山のはにせめても月の遅き夜はこなたとおもふ  
とあり、48丁オは以下六行分空白となっている。そして48丁ウは、

納言殿つるうちし給神のなるをとにいみしくてうしのおひてきこゆるた、いまは壹越調ならんとすけやすにふゑふきならせてきかせ給へはまことにそのてうしなりけりとてこうたうの内侍殿もけふし給いとおもしろくて弁内侍

もの、音をひきもならさて梓弓おして調をいかて知らむ

と続いている（以下は略）。これは『新注』九六「弦打の調子」の段に当たる。これを『新注』より引見すると、

（かみなりていとおそろしかりしに、御所は朝餉に渡らせおはします。六位の弦打めすほど、滝口のくやくが弓めして、冷泉の大）納言殿つるうちし給ふ。かみの鳴るおとにしみじく調子の合ひてきこゆる、唯今は壹越調ならむと、すけやすに笛ふきならさせてきかせ給へは、まことにその調子なりけりとて、勾当の内侍殿も興じ給ふ。いとおもしろくて弁内侍、

ものの音をひきもならさで梓弓おしてしらべをいかでしるらん

とあって、（）内が脱落していることがわかる。また九二一段の末の歌は、『新注』に、

山のはにせめても月のおそき夜はこなたと思ふもなほぞ待たる

とあって、松平文庫本は「もなほぞ待たる」の八字が欠字となっているのである。即ち『新注』によれば、九二段「月待つほど」の和歌末尾八字、九三段「富小路殿の最勝講」の全文、九四段「台盤所の御椅子」の全文、九五段「ことなる御祈」の全文、及び九六段「弦打の調子」の約三行分程を、松平文庫本「家集」は脱落していることになる。

今この間の字数を群書類従本（上冊、51丁ウ3行目から53丁オ6行目3字まで）では五七八字あり、（和歌を除く、くは二字分、注記も数に含む）、彰考館本（56丁ウ5行目8字から58丁オ7行目2字まで）も漢字と仮名の異同のある箇所もあるが、同じく五七八字（三字脱落あり、群本と同じ数え方をする）であって、これを松平文庫本「家集」に当てると、前述の如く十行、平均二十三字とすれば約三頁分（和歌三首、三行分を含め）となる。これが四頁分となれば一丁とばす、即ち三枚重ねてめくる結果の脱文と考えられる。しかし三頁分は判断に窮する。前引のごとく九二段末の歌は、「山のはにせめても月の遅き夜はこなたとおもふ」とあって第四句の七字までを残している訳だが、

この不自然な切れ方は、実は彰考館本でも同様であり（56丁ウ4行目）、第四句の一字と第五句七字は「も猶そまたる、」として次行に移っている。また九三段はその下に続けて記されている。とすれば、松平文庫本「家集」の親本は、彰考館と同じ字配りで筆録された本である可能性が強い。前に触れた如く、岩佐美代子氏は彰考館本がその末尾欠損部分ごく自然に各丁の下部に集まっていることから、「いかにも欠損の生じた祖本をそのままのうぶな形で写したような趣を残している」ようだと述べられているが、例えば松平文庫本「家集」の73丁ウ・74丁オ・74丁ウ・75丁オ・75丁ウ・76丁オのあたり、78丁ウ・79丁オ、81丁ウ、83丁ウ等々は、彰考館本の85丁ウ・86丁オ・86丁ウ・87丁オ・87丁ウ・90丁オ・90丁ウ・91丁オ、93丁オ・93丁ウ、95丁ウ等々と字配りが殆ど同じで、即ち松平文庫本「家集」にも末尾欠損部分が各丁の下部に集まり、欠損の生じた祖本そのままを写した如き趣がうかがえる訳で、やはり松平文庫本「家集」の親本は、彰考館本の親本と同一配字の本であった可能性が大であると思われる。とすると、松平文庫本「家集」の脱落部分を彰考館本にみると三十二行と二字で、彰考館本は各丁十行書きとするから三頁強となる。偶数頁なら落丁あるいは重ねてめくるとということが考えられる。そして往々としてそれに気付かずすぐ後に続けて書写することがある。しかし松平文庫本「家集」の場合、何かの事情で親本に彰考館本での三頁強の脱文があつて、筆録者自身もその点に不審を感じ、48丁オの四行目までを書写し、次を不明として以下同丁六行分を空白とし、48丁ウに九六段の途中から続けて書写したものとと思われるのである。つまりこの脱文は松平文庫本の筆録者のミスによるものではないと考えた方がよいように思う。勿論その親本で三頁分を脱落した理由は依然説明がつかない（本来原本はこの三頁分が二頁に記されていた本であったか。五七八字分に三行分の歌をとるとして、仮りに十二行、二六字平均で記せばよい。それを十行書に書写したとする。彰考館本の親本は脱文なく書写したのに対し、松平文庫本の親本は二



丁重ねてめぐり中の二頁分を脱落したと考えれば、一応の説明がつこう。しかし今述べた如く松平文庫本の親本の歌の書き方が彰考館本と同じであるとすれば、即ち両書の親本は同一配字の本であると考えると、十二行書きの本を十行書の本に別々の人が書承し、且つ全く同一配字の本が出来るとは考えにくい。一人で二本書写し、一方にミスが生じたと考えれば、これまた一応の説明がつくが、いかがであろうか。これ以上仮説の屋上屋を重ねることになるので、原本乃至祖本については不明とせざるを得ない。

ともあれ松平文庫本にはこうした大きな脱落があり、本書に古態性は論じられるにしても、その価値は半減するのである。

## 五

松平文庫本「家集」が他の伝本と異同ある所は上記した通りで、中には独自のものもあるが、更に数ヶ所取り挙げ。主に玉井氏著『新注』の本文と比較し、松平文庫本の位置を考えたい。

『新注』一一一「ものまね」の段において、その中程の箇所を引用する。

伊予の内侍はいつも臨時の祭には人長になりてみづからわをつくりてそれもちてまはる。かほふるべしなごきこえしかば、「あまりにこの役の勤めたくもなき」とて、わびられしも、まこととおぼえてをかし。弁は行幸のとしにうそをふく役を勤め侍りし。

右の傍線部 a・b を諸本に見ると、

〈群書類従本〉

- a みつからわをつくりてそれをもちてはるかほふるへし
- b 行幸のとしに

〈彰考館本〉

- a みつからわをつくりてそれをもちてまはるかほふるへしなときこえしかは
- b 行幸のそらそらに

〈静嘉堂文庫蔵和学講談所本〉

- a みつからわをつくりてそれをもちてまはるかほふるへしなときこえしかは
- b 行幸のそらに

〈静嘉堂文庫蔵小諸蔵書本〉

- a みつからなときこえしかはそれをもちてまいるかほふるへしなときこえしかは
- b 行幸のとしに

〈松平文庫本〉

- a みつからなときこえしかはそれをもちてまはるかほふるへしなときこえしかは
- b 行幸のとしに

とあり、『新注』の考異によれば、群書類従本は「まはるまはる」の下に「なときこえしかば」の八字脱のところ、内閣文庫本により補ったとされる。内閣文庫本は「行幸のとしに」が「行幸のそらに」とあって、「としに」と傍書してい

るとされているので、従って内閣文庫本は彰考館本・和学講談所本と同文関係にある。そして松平文庫本は「みづから」の下に「なごきこえしかば」を竄入している点、小諸蔵書本と同文関係にある。この関係を他の箇所にもみると、例えば前にもふれたが、『新注』では二三二段「馴れける宮の花」の二首目の歌は、

みや人のなさへのがるこの春ははなやか  てあだにみるらむ

で、玉井氏の考異によると、内閣文庫本は傍線部を「みゆらむ」としている。これを諸本にみると、彰考館本は、

みや人のなさへのかる、このはるははなやか・マ・マ・マ・てあだにみるらん

とあり、和学講談所本・小諸蔵書本・松平文庫本も共に「みるらん」と群書類従本に同じであり、内閣文庫本と彰考館本に異同がみえる。また『新注』の空白部は彰考館本で右の如く「か」の下二字分を点で記しているが、和学講談所本・小諸蔵書本・松平文庫本では「か<sup>へり</sup>敷」として同じ傍書を持つ。また『新注』一三七段「夜半の水鶏」は、

よるのおとどは、堂の御所よりあさがれひを隔てたれば、内侍も二三人ばかりぞ<sup>a</sup>臥したる。夏ははしあけたるに、月のさし入りてまばゆきほどにぞ見えし。夜ふけぬれば柳の梢のおそろしきに、<sup>b</sup>たてて寝<sup>c</sup>なんとするをりしも水鶏のたたく音のきこゆるを<sup>d</sup>勾当の内侍殿  きくやとあれば少将内侍、

あけてのみぬる夜がちなる月影にたが戸をたたく水鶏なるらん

これをききて弁内侍、

こずゑをぞたたきもすらん月みむと  ささぬよはのくひなは

とあり、傍線部を諸本にみると、

〈群書類従本〉

a 「ふしたる」、b 「たて、ねなんと」、c 「おりしも水鶏の」、d 「きくや」

〈彰考館本〉

a 「ふしたる」、b 「たて、ねなんと」、c 「をりしもくみなの」、d 「きくや」

〈和学講談所本〉

a 「ふしたつ」、b 「たえてねなんと」、c 「おりしもくみなる敷の」、d 「しか敷る敷きくや」

〈小諸蔵書本〉

a 「ふしたる」、b 「たえてねなんと」、c 「をりしもくひなる敷の」、d 「しか敷る敷きくや」

〈松平文庫本〉

a 「ふしたる」、b 「たえてねなんと」、c 「おりしもくひなる敷の」、d 「しか敷る敷きくや」

とあり、松平文庫本は小諸蔵書本とcにおいて一字異同はあるが、同文関係にあるとみてよからう。玉井氏の考異によれば、内閣文庫本はb「たて寝なんと」、c「をりの水鶏の」とあるあるようで、従ってここでも彰考館本とは異同がある。次いで『新注』一四〇「露台の月」の段であるが、この段は既に玉井氏により群書類従本と内閣文庫本に重写が二ヶ所あることが指摘されている。<sup>注11</sup> 群書類従本にみると、

—— 三日かほとはこきもの、くにてよるなどのあつきたへかたしあさかれぬのみすうちかつきてなけしによりか、りてそわかき人くうた、ねなからあくるまでみなふしたる三日すきて七月一日  いろのすちかうしふたへあやなと心をつく  かさねともをそきかへ侍し二日はまた  きぬふとんてうのうす物すちかう

のなかにぬひ物しいろくのゑのくにて  などをかく心もをよはぬほとなり仁

〔下25ウ〕さふらはせ給御所出御なりて南殿のつゆ [ ] せさせおはします御ともに

女房たちみな露台になみゐたり女院の御かたみ [ ] 御らんしいたされたりし——中略——後にき、

しかはまた [ ] 中将して院の御所よりおさせられけ [ ] 夜のことなり十四日のお

なしく月 [ ] 南殿釣殿などにてあそひ侍しにいつ [ ] 〔下26ウ〕れては覚ゆるを人々おほせられしかは少

将 [ ] の方さまみかは水のすゑ弓庭殿 [ ] まつなとはうつもれて月花門のはしら<sup>A'</sup>あくるまでみなふした

る三日すきて七月一日いろのすちかうしふたつあやしなと心をつく [ ] かさねともをそきかへ侍しに二日は

ま [ ] きぬ [ ] ふせんてうのうす物すちからのなかにぬいもの [ ] しいろくのゑのくなどをかく心もおよはぬ

[ ] さふらはせ給御所出御な [ ] せさせおはします御とも [ ] まつなとはうつもれて [ ] 〔下27オ〕れひ

てたる只今もとめいてたらんこ、ちしおほゆるに月のさやかにやとりたる程たとへむこそとて少将内侍

水の上は雲間の月の心ちして [ ] 影そさやけき

とあり、傍線部 A が A' と、二重傍線部 B が B' とそれぞれ重複し、この誤写は、群書類従本乃至その系統本が後出本たる証となるのである。しかし松平文庫本では、

後にき、しかはまた [ ] 中将して院の御所よりおさせられけ [ ] 夜のことなり十

四日のおなしく月 [ ] 〔下27ウ〕南殿<sup>釣殿</sup>釣殿などにてあそひ侍しにいつ [ ] れておほゆると人々お

ほせられしかは少将 [ ] の方さまみかは水のすゑ弓庭殿 [ ] まつなとはうつもれて月華門のはし

[ ] れいてたる只今もとめいてたらんこ、ちし [ ] おほゆるに月のさやかにやとりたる程たとへんこそ

とて少将内侍

水のうへはくもまの月の心ちして [ ] かけそさやけき

とあり、傍線部において、前引群書類従体の傍線部A・二重傍線部Bの重写部分が空字となっている。和学講談所本・小諸蔵書本・彰考館本も松平文庫本と同じく重写がない。従ってここでも小諸蔵書本は松平文庫本と同文関係にある。但し小諸蔵書本は右の傍線部を、

まつな<sup>ハ</sup>とはうつもれて月花門のはしら<sup>マ</sup>〇れいてたる

とあって、本文上段に〇の箇所、即ち群書類従体のA・Bに当たる注記がある。恐らく小諸蔵書本は群書類従本の如き本と校合しながら筆録されたものであると思われ、よって群書類従本乃至その系統本よりも後に成立した本と考えることが出来よう。同様の考えは、次の点からも求められよう。即ち『新注』一四五「塩やく煙」の段において、松平文庫本では、

九月廿七 [ ] 権大納言ひるはんなりさきのはんつとめさりしかはりにこよひは夜もすから候はむ<sup>77オ</sup>などの給ひて在明の月いつる程にそいて給し二のたいの程すくるともおもはぬかたにたなひきにけりといふ歌をなかめてすき給しおりからおもしろ<sup>ハ</sup>など人くきこえしをさとに少将内侍

やがて我恋のけふりにくらへはや [ ] たははるかなり共

返し弁内侍

はるか成塩やはよそのけふりに [ ] 思ひのけつかたはなき

とあるところ、傍線部は和学講談所本も同じであるが、群書類従本では下冊30丁オに、

少将内侍に申遣したりしかは少将内侍

とあって、松平文庫本に脱文があることがわかる。ここを小諸蔵書本は、

少将内侍に申遣したりければ少将内侍

とあって、群書類従本と異同はあるが、松平文庫の脱文部分が小さく下に続けられる（彰考館本は群書類従本の「に申遣」の「に」はないが、同文が小さく下に続けられる）。

この点でも小諸蔵書本は、群書類従本の如き本を校合本として参照しながら筆録されたものということができよう。しかして、ここにおいて松平文庫本は後出性を予想される群書類従本にある本文を脱落している訳だから、この箇所においては、松平文庫本の本文に群書類従本の本文より後出性が指摘されるのである。勿論この点から、松平文庫本が群書類従本より後に成立した本であるとは言えないのであって、松平文庫本や和学講談所本・小諸蔵書本・彰考館本の如く「少将内侍」の下に脱文を持つ系統の本は早くより成立していたと考えられるであろう。

## 六

松平文庫本「家集」について、他諸伝本と異同部分を更に細かに検討せねば、その評価をより正確に求め得ないであろう。また以上述べたところからおわかりのように、松平文庫本を検討するに際して群書類従本・彰考館本・静嘉堂文庫蔵和学講談所本・同蔵小諸蔵書本の四本しか対校していない。従って文中に他伝本にはとするとところは、正確に言うならこの四本には、ということになる。玉井氏は、内題も奥書もない一冊仕立ての内閣文庫蔵「弁内侍寛元記」が最も初生の形を示すもので、彰考館本はそれに次ぐものと述べられている。<sup>注12</sup>この内閣文庫蔵「弁内侍寛元記」を私

は被見していないので、その比較において松平文庫本「家集」の伝本上の位置を論じることが出来ないが、しかし玉井氏の『新注』の考異を参照する限りにおいて、松平文庫本は、他伝本に見えぬ独自の文や傍注を持っている点で、特異な本として注目すべき本であり、前記の如く大きな脱落はあるものの、諸本研究では今後検討を要するものであると思う。

以上述べてきたところをまとめると、松平文庫本「後深草院弁内侍家集」一冊本は、古態性を指摘出来るが、前に見た如く他伝本に比して傍注が多い点、その親本に空字が予想されそれを他伝本で校合したと考へられること、また松平文庫本は後代の書写になる本で（「尚舎源忠房」の印を持つのが一つの目安となるか）、小諸蔵書本に近い本（但し本稿では上記の如くわずかに第二節に挙げた(2)(4)(5)(6)(7)(9)(11)(12)の八例と、前節の四例を挙げたにとどまるが）であり、なおその親本は彰考館本と同一の文字配置を持つ本であったと考えられるということである。勿論更に細部にわたって検討せねばならぬであろうし、殊に内閣文庫本との比較検討はせねばなるまい。

なお松平文庫には「弁内侍寛元記」と題する本がある。顕著な異同箇所を二例挙げると、前に引見した一四〇段「露台の月」の重写箇所において、本来あるべきA部分を欠いて、A部分を残している他、

すゑ弓庭殿  まつなとはうつもれて月花門のはし

も脱文となっている。この点では、この本は群書類従本の系統本で、群書類従本乃至その祖本より後に成立したものと考えることが出来よう。もう一つ脱落箇所を挙げると、これも前に触れた段であるが、八一「閑院殿炎上」の段の初めのところは、

建長元

二月一日よふくるほと大はん所よりまいりて鬼間のぬのしやうしかけ少将の内侍おほはらの、使にたちて心ちわ



ひしくてつほねにふしたりけるかあらくた、くをとにおとろきて火とききていそき御所へまいりたりければ人もおはしまさすけふりはみちたり——下略

とあつて、傍線部「しやうしかけ」と「少将の内侍」の間に、松平文庫本「家集」で数えれば約十九行分、群書類従本では約二十一行分が脱落している。

なお書誌に触れると、縦二七・三五センチ、横二〇センチの一冊本で、表紙は青色、左方上のすみに「辨内侍寛元記」の外題があり、「松一一六一三三」の架蔵番号を記したラベルを貼す。内題はない。前後に遊紙が各一丁あり、書き出しは二丁オモテ。墨付一一八丁。奥書はない。一一八丁ウラに「尚舎源忠房」と「文庫」の印がある。各丁九行、一行一九字から二十二字程度で、和歌は二行に記す。本文には朱筆で読点が付され、やはり朱で人名を見せ消ちにしている。

前に触れた一三二段「馴れける宮の花」の二首目の歌は、

みや人のなさへのかる、このはるは

はなやか  てあたにみゆらん

とあり、第五句が「みゆらん」とある点で内閣文庫本「弁内侍寛元記」と同じ（「ん」と「む」の異同あるが）である。松平文庫本「弁内侍寛元記」は今群書類従本の系統本と述べたが、上記重写部分は玉井氏の『新注』の考異によると内閣文庫本にも指摘されるところであり、こちらも内閣文庫本と比較検討を要する本であるといえるだろう。以上簡単ではあるが、松平文庫本「弁内侍寛元記」について触れておく。不備多々あるうが大方の御批判・御教示を賜わりたい。

（八月二十六日脱稿）

補注

注1 玉井幸助氏著『弁内侍日記新注増訂版』（大修館書店、昭41・11、の章段分けによる。

注2 玉井氏「大原の三叔と二人の姉妹」（『学苑』昭33・8）に、三姉妹の長幼の順の考察がある。なお注1掲書「四 弁内侍とその家族」

三二二頁にも氏の考察が見える。

注3 注2に同じ。

注4 注2に同じ。

注5 注1掲書「三 成立」三一九頁による。

注6 「岩見沢駒沢短期大学論集」第一号（昭和63年3月）に翻刻を試みた。御被見賜わりたい。

注7 注1掲書「一 伝本」三〇二頁。

注8 岩佐氏編『彰考館蔵弁内侍日記』（和泉書院、昭61・3）「解題」一一五頁。

注9 注1掲書、二三六―七頁。

注10 注1掲書、一四七頁。

注11 注1掲書、二四九頁。

注12 注1掲書「一 伝本」三〇五頁。

追記 本稿は本学の61年度学術研究助成（個人研究）による成果の一部である。